TOPIC

大地に根付く、未来の種

～オイスカモンゴル20年～

日本の約4倍という広大な国土を持ち、多くの国民が伝統的な遊牧生活を送ってきたモンゴルでは、1990年の社会主義体制崩壊以降、資本主義経済への転換と環境の変化により生活が困難になる遊牧民が増加。安心して暮らすための定住地や仕事を求めて首都ウランバートルに人々が集中し、人口の不均衡や開発に伴う自然破壊など、新たな課題を抱えるようになりました。こうした問題に向き合い、モンゴルの「真の発展」を目指すため、オイスカモンゴル総局は活動を続け、今年設立20年を迎えました。4つの活動の柱とともに、その歩みを振り返ります。



オイスカモンゴル総局

2007年、当時日本語のツアーガイドをしていたニンジン・ギリヤセド事務局長が、オイスカ評議員のペマ・ギャルポ氏を通して、故中野利弘顧問（当時公益財団法人オイスカ副理事長）と出会ったことをきっかけに、オイスカモンゴル総局を設立。翌08年から開始した「子供の森」計画や、訪日研修生の派遣を皮切りに、青年育成を基盤とした環境保全や地域開発に取り組む。現在、訪日研修生OB・OGの協力を得て、首都ウランバートルをはじめ13県で活動を実施。



2011年の研修生OGであるトゥブデンドルジ・トゥメンデンベレル（愛称トゥメン／前列左端）は現在、ニンジン事務局長と両輪となって、オイスカモンゴルのプロジェクト全般における企画から実施・報告までを一手に担っている

1 人材育成 国づくりの〝種〟が花開く

オイスカモンゴルを語る上で欠かせないのが、人材育成です。ニンジン・ギリヤセド事務局長は総局設立当時、さまざまな課題に直面するモンゴルの将来を見据え、「国の真の発展のためには、環境保全や産業開発、そしてそれらを担う青年の育成が必要」と考え、2008年から研修生を毎年日本へ派遣。農業や地域開発の知識や技術を習得することはもちろん、オイスカの理念を理解し、モンゴルで活動の輪を広げる人材を育ててきました。これまでに33名が日本での研修を修了し、スタッフとなったり、ふるさとで農業をしながらオイスカの森づくりに携わったりと、各地の発展に貢献しています。また、近年は家族で「子供の森」計画（以下、CFP）に参加し、世代を超えてオイスカの活動に取り組む例も見られるようになりました。

こうしたOB・OGの存在が支えとなり、モンゴルでは設立当初から日本人駐在員を置くことなく、現地の人材を主体とした取り組みが続けられています。「国づくりは人づくりから」というニンジン事務局長の思いは、研修生という〝種〟となり、各地で花を咲かせています。

2 環境保全 地域や国に認められる森づくり

モンゴルの一部の地域では、気候変動に起因する火災や、過放牧、伐採などによる森林減少が問題となっています。オイスカモンゴルは08年、ウランバートルでCFPを開始。その後、研修生OB・OGの協力で少しずつ活動地域を広げ、これまで9県57校（25年度末時点）の子どもたちと共に、緑化と環境教育を進めてきました。

さらに16年、この活動を評価したブルガン県セレンゲ区長が、OB・OGによる組合に森林管理を委託。これを機に、「トヨタ環境活動助成プログラム」（以下、トヨタ助成）や「緑の募金」を活用した森林保全にも各地で取り組み始めました。植栽後の維持・管理を見据え、地域住民と共に植林するだけでなく、生物保全の観点を取り入れた環境教育にも取り組み、将来にわたり地域で森が守られるよう啓発活動にも力を入れています。

こうしたOB・OGの活躍は国からも評価され、20年5月、国の環境保全に多大な貢献をしたとして、4名が自然環境・観光省より「自然環境分野優秀賞」を授与されました。

また気候変動対策としてモンゴル政府が進める「10億本の植樹」国民運動では、23年から日本政府の支援による事業※をオイスカモンゴルが担い、各地の住民と共にこれまで約5万本の苗木を植え育てています。



オイスカモンゴル総局
事務局長
ニンジン・ギリヤセド

総局20年を迎えて

モンゴルの有する美しい大自然や独自の生態系、伝統的な遊牧文化は、世界的にも保護が必要な貴重な財産です。この大切な財産を守るため、オイスカモンゴルは2007年に活動を開始しました。

私たちは、環境保全と地域開発は切り離すことのできない密接な関係にあると考えています。人が自然と共に豊かに暮らせるよう地域が主体性を持って活動し、住民自身がその担い手となることが、地域の環境を守ることにつながります。そして、その取り組みを牽引していく人材を育てることが、それぞれの地域、ひいては国の発展に向けた第一歩となります。オイスカモンゴルは設立以来、多くの若者を日本へ派遣してきました。日本の農業の技術や知恵、働く姿勢などを身に付けて帰国した若者たちは、学んだことを自身の生活や仕事に活かし、各地でのオイスカの取り組みの原動力となっています。

オイスカモンゴルは、たくさんの日本の皆さまに支えられ、今年20年を迎えることができました。心より感謝申し上げます。皆さまの温かいご支援を力に、これからも歩み続けてまいります。



1

1／ハタンバータル・ヒシゲト（愛称ヒシゲ／写真右）とバーサンドルジ・バダムサイン（愛称サイナ／左）夫婦は、ともに訪日研修生OB・OG。モンゴル北部地域での農業・緑化プロジェクト実施の要であり、「10億本の植樹」の実施にも欠かせない存在

2／ゴビ砂漠の広がる南部地域でも「10億本の植樹」を実施。事業開始セレモニーには、井川原賢駐モンゴル大使（中央）も出席した



2

※22年11月、岸田文雄首相（当時）とオフナー・フレルスフ大統領との首脳会談で、日本政府がモンゴルの「10億本の植樹」国民運動への支援・協力を表明したことをきっかけに、オイスカモンゴルも活動に参画。モンゴル国内の北部・南部の4ヵ所で、OB・OGを中心に地元住民と協力しながら植樹活動を展開している

3 地域開発
「豊かな暮らし」が活動を支える

地域で森が長く守られるためには、森づくりに関わる地域住民の生計向上も重要です。ブルガン県の北部地域では、環境保全や生物多様性に関する事業を行うにあたり、養蜂事業の改善にも取り組みました。同地では、もともと草原を活用した養蜂が行われていましたが、技術的な改良は長年進んでいない状況でした。そこで、トヨタ助成を活用して18年から養蜂に必要な資機材の供与や技術研修を実施し、さらにオイスカ静岡県支部の支援を受けて、蜂を厳しい寒さから守るための越冬庫の設置などを進めてきました。以降、少しずつ設備を改善し、現在、支援対象村では、安定してハチミツを生産できるようになっています。さらに、ハチミツの品質向上や販路拡大に向けた新パッケージの作成など、住民の収入増につながる試みも続けられています。

また21年に開始した「熊本×モンゴルプロジェクト」では、モンゴルの女性の自立支援を目的に、フェルト製品などのハンドメイド作品を日本で販売。収益の一部はコーディネートを担うオイスカモンゴルの支援に充てられ、現地の活動を支える力になっています。さらに人的交流や地域との連携など、つながりを深める取り組みも進めています。





上／ブルガン県セレンゲ村の養蜂事業によってつくられたハチミツは、高品質で安心・安全と近隣地域でも人気がある

下／「熊本×モンゴルプロジェクト」は、宮原美智子氏（左）をはじめ日本のメンバーがモンゴルへ何度も足を運び、現地の女性たちとの交流と信頼を深めながら進められている

4 国際連携
日本からモンゴルへ海を渡る人、モノ、思い

設立以来、オイスカモンゴルの活動は、日本のオイスカ支部や民間組織に支えられて進められてきました。

静岡県支部は、08年の植林ツアーをきっかけに毎年現地を訪問し、各地の緑化や住民の生計向上事業への支援を続けています。11年には、こうした活動を契機にドルノゴビ県と静岡県が友好協定の覚書を交わすなど、両県の相互協力の促進にも貢献しています。また岐阜県支部の働きかけにより、岐阜市消防本部からモンゴル各地の自治体へ、これまで4度にわたり救急車と消防車、計8台が寄贈されました。北海道では、支部が仲介役となり、用具の不足で冬季スポーツに取り組めない子どもたちに、札幌市からスキーやスケート用品が寄贈された例もあります。さらに、前述の「熊本×モンゴルプロジェクト」は、オイスカ熊本県推進協議会の支援を受けて実施されているものです。

こうした日本との強いつながりが、幅広く、継続的なオイスカモンゴルの活動を可能にしています。

＊＊＊＊

ニンジン事務局長の思いから設立したオイスカモンゴルは、研修生の派遣やCFPなどの環境保全活動に始まり、設立10年目以降は、OB・OGのふるさとを中心に、地域に根ざした取り組みとしてモンゴル全国に広がっていきました。その活動が、モンゴル政府ならびに日本政府からも評価され、現在は「10億本の植樹」など国家規模の事業を担うまでになっています。今後も、組織基盤を強化し、持続可能な運営体制を構築するばかりでなく、この20年間の歩みと成果を礎に、地域住民、行政、企業、そして支援者の皆さまと共に、4つの柱となる重点活動をさらに充実・発展させていきます。

近年、日本とモンゴルの関係が政府レベルから民間レベルまでますます活発になる中、モンゴルの「真の発展」に向けて、これまで蒔いてきた〝種〟が力強く根を張り、さらに大きな花を咲かせられるよう、これからもオイスカモンゴルは前進していきます。



静岡県支部企画のツアーで、前年度の植栽地を再訪する参加者たち。苗木の生長を確認するとともに、管理に携わるOB・OGを激励した



岐阜市より贈られた救急車両は、コロナ禍でも大活躍した

PHOTO REPORT

オイスカモンゴル設立20年

記念式典＆交流ツアー

7月31日～ 8月7日、オイスカモンゴル設立20年を機に、記念式典と交流ツアーを実施。オイスカ静岡県支部、宮城県支部、豊田推進協議会、熊本県推進協議会などの会員を中心とする41名が8月1日の記念式典に参加し、ウランバートル、セレンゲ（ブルガン県）、南ゴビの3つのコースに分かれて、モンゴル各地を巡りました。

ウランバートル

記念式典



モンゴル各地で活躍する現地スタッフや全国のOB・OG、日本からのツアー参加者を含め、約80人が集い、総局20年を祝った

「北極星勲章」受章！



人材育成や環境保全活動を通じてモンゴルの発展に多大な貢献をしたとして、ニンジン事務局長（左から2人目）とトゥメン（左から3人目）に最高権威の国家勲章の1つである北極星勲章が授与された。またモンゴルで活動する日本人への表彰も行われ、政府関連機関等より6名に勲章が贈られた



オイスカモンゴル設立に関わったオイスカ評議員のペマ・ギャルポ氏も出席

慰霊祭挙行＆観光





参加者コメント



太田　良治　オイスカ宮城県支部　副会長

式典では、全国から集まったOB・OGの多さに、活動20年の長さを痛感しました。オイスカが継続して研修生を受け入れてきたこと、彼らの森づくりなどの活動がさらに若い人たちに引き継がれていることもよく分かりました。そして、こうした行事に日本からも参加することは、彼らを応援し、支えるための大事な機会であると感じました。

セレンゲ（ブルガン県）

研修生OB・OGと一緒に！



植林

モンゴル伝統の馬乳酒も体験



モンゴル文化体験

南ゴビ



ツアーには月光天文台（静岡県）の関係者も参加しており、ゴビ自然・歴史博物館と月光天文台の間で化石研究等に関する調印式が行われた。またゴビ観光協会とも調印が行われ、観光を通じた交流事業の協力体制が構築された

ゴビ自然・歴史博物館訪問

ラクダに乗ってゴビ砂漠を散歩

